

土岐川庄内川河川整備計画への提言

- 土岐川庄内川の魅力資源を活かした豊かな川づくりに向けて -

平成 17 年 2 月 27 日

土岐川庄内川コレカラプロジェクト
土岐川庄内川市民意見交換会

目 次

市民意見交換会の活動記録

1 . 土岐川庄内川 4 つの目標	2
2 . テーマ別の課題と方向性、提案したいこと	3
2 - 1 土岐川庄内川の原風景を大事にし、周辺の歴史文化を活かす 歴史・風景グループからの提案	3
2 - 2 多様な生態系を育む環境、ゴミのないきれいな川にするために 生態系・水質・ゴミグループからの提案	7
2 - 3 豊かな川体験を伝え、川を憩いの場とするために 体験・憩いの場グループからの提案	11
2 - 4 流域全体で治水安全度を高め、地域の防災力を高めるために 治水防災グループからの提案	16
付属資料 - 1 グループ別提案の項目まとめ	20
付属資料 - 2 水辺空間整備に関わる提案のポイント	21
付属資料 - 3 変化に富んだ多様な「場」と「空間」の配置	22
付属資料 - 4 個別のアイデア（個人、グループの意見より）	23
土岐川庄内川魅力資源マップ	25
流域全体図 1：土岐川・庄内川の魅力資源から見たエリア別の課題と方向性	25
流域全体図 2：エリアの特性から見た河川整備の方向性と留意点	26
土岐川・庄内川の魅力資源と課題・提案 マップ 1	27
土岐川・庄内川の魅力資源と課題・提案 マップ 2	28
土岐川・庄内川の魅力資源と課題・提案 マップ 3	29
土岐川・庄内川の魅力資源と課題・提案 マップ 4	30
土岐川・庄内川の魅力資源と課題・提案 マップ 5	31
土岐川・庄内川の魅力資源と課題・提案 マップ 6	32
土岐川・庄内川の魅力資源と課題・提案 マップ 7	33
土岐川・庄内川の魅力資源と課題・提案 マップ 8	34

市民意見交換会の活動記録

市民意見交換会は、平成15年の夏にメンバーを公募して発足しました。登録メンバーは、最終的に99名でした。（総参加申込者数：108名、退会者：11名）

全体会は10回行われ、その間に川歩きやグループ別の活動を行いました。

その成果として、1年目は流域の資源、課題を「情報マップ」にまとめました。

2年目は、テーマ別グループの提案をまとめる形で「提言」をまとめました。

【テーマ別グループでの取り組み】／参加者（開催日）

■生態系・水質・ゴミグループ（20名）

- ・下流での、水質、ゴミ等の点検 / 5名 (5/30)
- ・上流での、生態系の情報収集、水質検査 / 7名 (7/17)

■原風景・歴史グループ（11名）

- ・歴史情報の持ち寄りと整理作業 / 7名 (6/6)
- ・歴史環境、風景の現地調査 / 11名 (8/8)

■体験・憩いの場グループ（14名）

- ・流域の「歩ける道」と「憩いの場」の調査（個人で分担）
- ・自然と触れ合え、遊べる河原の現地調査 / 9名 (7/23)

■治水・防災グループ（11名）

- ・学習会1 治水の現状と課題 / 10名 (6/13)
- ・学習会2 地域防災を考える / 7名 (8/1)
- ・学習会3 ハザードマップワークショップ / 5名 (10/3)



第1回／ワークショップ



第5回／テーマ別グループでの提案づくり



第2回／川歩き後の話し合い

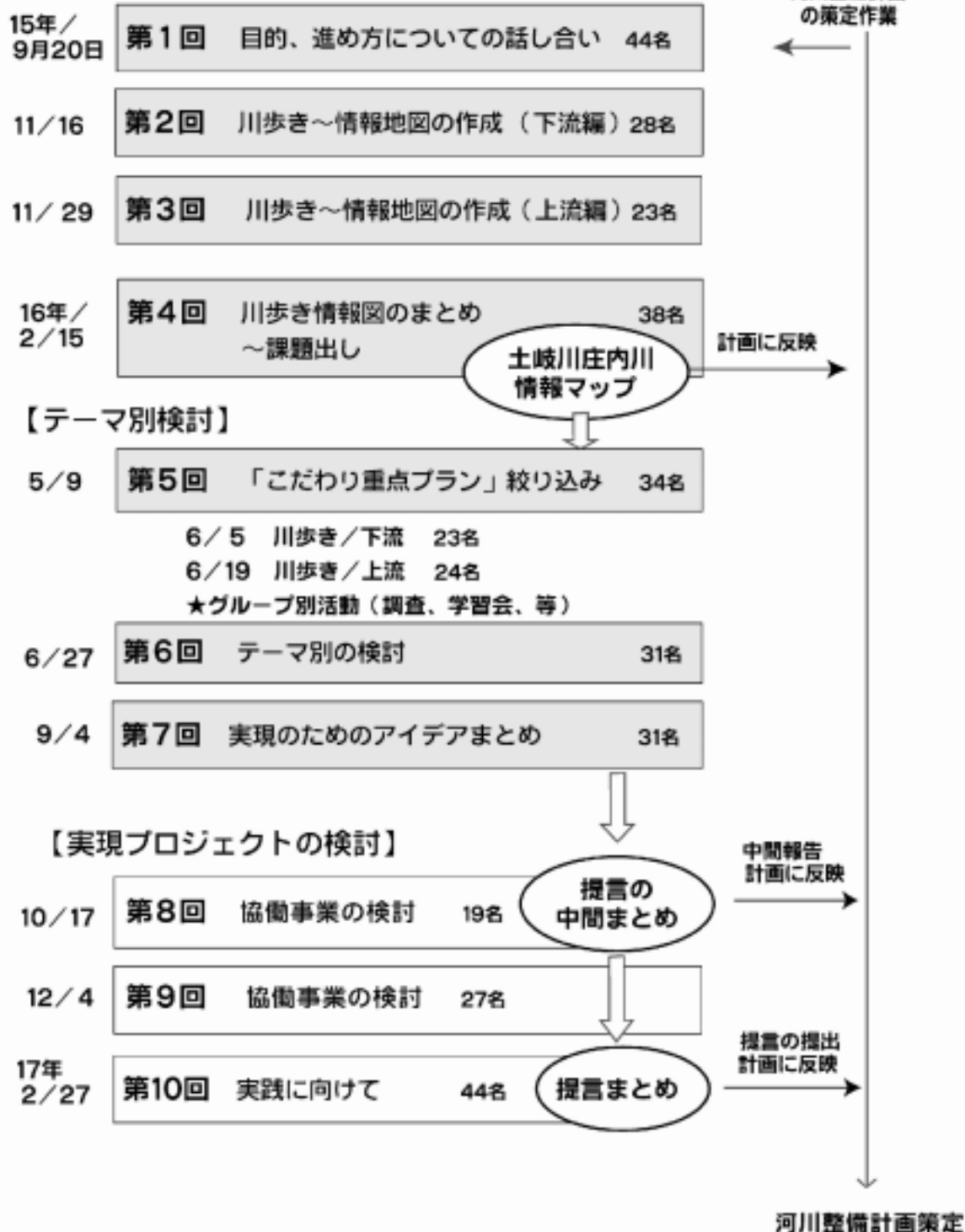


第3回 川歩き（魚道を点検しているところ）



H16年6月5日 川歩き（玉野溪谷）

市民意見交換会の開催日・テーマ・参加人数



土岐川庄内川河川整備計画への提言

- 土岐川庄内川の魅力資源を活かした豊かな川づくりに向けて -

平成17年2月27日

土岐川庄内川コレカラプロジェクト 第10回 土岐川庄内川市民意見交換会

基本的視点：川の魅力、川の豊かさに視点を当てる

土岐川庄内川は、今もなお特有の魅力資源が随所にあります。

第1に、河口にはラムサール登録湿地の藤前干潟があります。日本最大級の渡り鳥の飛来地を河口にもつ土岐川・庄内川は、日本国内はもとより「国際的河川」と言ってもいいでしょう。

第2に、玉野溪谷や虎溪山永保寺周辺、白狐温泉周辺など、自然の溪谷美を見ることができます。山奥にある溪谷ではなく、都市の身近な場所に溪谷があるというのも、都市河川としては希少であり、すばらしい自然的資源をもった川であるといえるでしょう。

第3に、上流の土岐川では、河床の岩盤に化石を見ることができます。瑞浪市では、子供たちや市民が土岐川で化石とりを楽しんでいます、「化石とりができる河原をもつ川」というのも、土岐川・庄内川特有の魅力です。

第4に、土岐川庄内川は、今もなお魅力的で多様な姿をとどめています。河口部に広がるヨシ原の風景、一色大橋の袂に残る松並木の風景、枇杷島橋下流の広い河川敷と多様な河川利用、周辺の歴史資源、勝川橋上流の中流部らしい川の風景、溪谷、多治見市から上流の街並みや人々の暮らしと結びついた川の風景など、多様な魅力資源がちりばめられています。

川の魅力資源に視点を当てて川を歩いてみるといろんなものが見えてきます。多くの市民が土岐川・庄内川の魅力に気づき、川と多様な関わりを持つ、そのための提案を行うことが、市民意見交換会にふさわしい提案のあり方ではないかと思えます。土岐川庄内川の魅力を発見し、川と関わりを持つということは、市民一人一人が今すぐにでも始められることですし、そこに土岐川・庄内川の「再生力」の源があると考えます。

「土岐川庄内川の魅力資源を活かした豊かな川づくり」ということを、河川整備計画の大きな基本テーマとしたい。



藤前干潟



玉野溪谷



クロマツ並木（一色大橋）

1 土岐川庄内川4つの目標

(1) 多様な生態系を育む環境、ゴミのないきれいな川にしよう

流域全体や周辺環境に視野を広げ生態系を育む「緑」と「池・湿地」のネットワークを保全する
河岸や流れの形態の多様性を確保したい。
水質を向上させ、生態系豊かな遊べる川にしたい。
ゴミのないきれいな川づくりを進める。



中流独特の川の風景（吉根橋上流）

(2) 川原の風景、歴史資源を保全活用していく

土岐川庄内川の特有の美しい風景を保全する。
川と人のかかわりの歴史を伝える遺構を大事にする。
周辺の歴史ポイント（史跡、神社、仏閣、街道、街並み等）を川づくりに活かす。
見晴しのいい場所（ビューポイント）から、川の風景を楽しむようにする。



万場の渡し跡（万場大橋下流）

(3) 豊かな川体験を伝えたい、憩いの場をつくりたい

もっと川に近付きやすくする。（特に下流域）
川沿いを歩ける道、サイクリングできる道を確保したい。
自由に遊べる河原が少ない。河原の利用、管理についての指針が必要。
子どもたちの、水辺での体験をもっと豊かにしていきたい。



化石とり（瑞浪市松ヶ瀬橋）

(4) 流域全体、地域参加で、治水・防災を考えよう

雨水貯留施設の普及など流域全体で「ゆっくり流す」ための工夫が必要。
災害を最小限に抑えるための対策が必要
防災に対する市民意識を高め、地域の防災対策を強化する
堤防強化と併せて水防拠点を充実させる



桜並木と街並み（多治見市）

2 テーマ別の課題と方向性、提案したいこと

2 - 1 土岐川庄内川の原風景を大事にし、周辺の歴史文化を活かす

歴史・風景グループからの提案

主要なテーマと代表的な場所

原風景的自然を大事にする

【玉野溪谷・虎溪山永保寺・白狐温泉などの溪谷美 / ヨシ原が広がる河口部の風景 / 竜泉寺崖下の自然】

河畔林や並木のある川の風景を大事にする

【一色大橋クロマツ並木 / 多治見市に残る桜並木 / 川に点在する庄内川らしい樹木：ムクノキ、エノキ、アキニレなど】

川と暮らしにまつわる歴史を活かす

【桜佐のヨゲと霞堤 / 水屋 / 正徳橋下流右岸の川湊跡 / 「万場の渡」などの渡し跡 / 三階橋付近の樋門 / 人造石工法 / 庄内用水の通年通水など】

川周辺の歴史・文化ポイントと川をつなぐ

【美濃路、佐屋街道、旧鎌倉街道、岩倉街道、下街道など旧街道 / 歴史的街並み / 神社仏閣・史跡 / 中流部から上流部に分布する古墳群など】

ビューポイントを川の名所として活かす

【金城埠頭から見た導流堤 / 明德橋下流のヨシ原 / シソ畑 / 万場大橋緑地から見た川の風景 / ふれあい橋から見た風景 / 大留から桜佐、勝川橋にかけてのダイナミックな川の景觀 / 東谷山から見た川の風景 / 鹿乗橋上流玉野溪谷 / 虎溪山永保寺周辺 / 白狐温泉周辺など】



ムクノキ



河口部ヨシ原



中流部河原のある風景 / 大留橋上流



白狐温泉の溪谷

提案 1 / ビューポイント（見晴らしのいい場所）を、川の見所として整備する

【趣旨】

土岐川庄内川を豊かな環境として再生していくためには、多くの市民に土岐川庄内川の魅力を知ってもらうことがその第1歩となる。土岐川庄内川には、ビューポイントがたくさん存在する。そうした場所を市民参加でリストアップし、土岐川庄内川の見所として保全し整備する。河川整備に当たっては、見所（見る場所、見える風景）への配慮が必要である。

【考えられる取り組み】

- ・川の見所には、「土岐川庄内川見所標」(見所マーク)をたてる
- ・河道の幅などに余裕がある場所には、堤防を広くしたミニ広場(川の一里塚)を整備したい
- ・ミニ広場にはくつろいで眺められるように木陰やベンチを設置し水辺におりられるようにするとよい
- ・視点場(眺める場所)の整備だけでなく、視点場から見える風景を保全する：河川整備に当たっては対岸からの眺めも考慮するなど
- ・「土岐川庄内川見所ガイドマップ」をつくる



万場大橋下流からの風景

【活用・展開イメージ】

- ・「川の風景」の定点観測場、生き物や水質の定点観測場、ゴミ掃除(アドプト事業)の重点区域、イベント会場など、「定点場」としての多様な活用展開が見込まれる
- ・河川環境を風景という視点から評価するポイントとして活用できる
- ・風景の変化をデータとして蓄積し、河川整備に活かす

*アドプト事業は1985年にアメリカのテキサス州道路局が高速道路の周辺のごみ清掃を沿線住民に依頼した「アドプト・ア・ハイウェイ」が起源で、住民団体や企業が道路の一区間を行政に代わって清掃する仕組み。清掃活動をしている場所には管理している団体等の名前を記した看板が立てられる。庄内川を含めいくつかの河川でこの事業が取り組まれている。

提案2 / 旧街道との結節点や川と道が交差する橋詰めに「川の一里塚」など小広場を整備する

【趣旨】

川と交差する旧街道は、周辺の歴史的資源と結びついており、旧街道と川との結節点を中心として周辺の歴史資源と結ぶルートを設定すると川からまち(歴史)まちから川へという人の動きをつくることができる。旧街道に限らず、橋は川と人・まちとの接点であり、橋詰めの堤防を広くして「川の一里塚」など小広場を設けることが望ましい。橋の周りの堤防を広いものにしておくことは防災面でも有効である



枇杷島橋の袂に建っている美濃路道標

と考えられ、そこから川やまちへアクセスする入り口ともなりうる。また、橋詰め広場ができることにより、川を眺めるビューポイントとしての機能が充実する。

【課題】

- ・既存の橋詰めや堤防敷地にはスペース的な余裕がない
- ・道路管理者や自治体、地権者等の理解と協力が必要

【河川整備の課題】

- ・橋詰広場を整備することを河川整備計画の目標に掲げ、橋の架け替え時に道路管理者や周辺の関係

者などの協力を得るなどして、少しずつ実現させることが考えられる。

- * 現在架け替え中の一色大橋（平成20年完成予定）や今後予定されている枇杷島橋の架け替えなどで可能性を検討できないか。
- ・ 橋詰から川へのアクセスや水防活動、災害時の物資（海上輸送）の荷揚げ場など、多様な活用が見込まれる。

提案3 / 川の魅力と歴史資源ガイドマップを作成する

【趣旨】

市民意見交換会での情報交換や現地見学でも、相当数のビューポイントや魅力的な歴史資源がリストアップされている。こうした魅力資源発見の取り組みを全域に広げ、市民参加でガイドマップづくりを行う。その参加プロセス自体が、市民の川への関心を高め、ウォーキンググループや川守グループ、ガイド役などの発生など、具体的なアクションにつながると思われる。

【考えられる取り組み】

- ・ 川の魅力資源や歴史資源発見行動を行い、ガイドマップを作成する
- ・ 川と周辺を回遊するルートを考案する
- ・ 史跡には説明板、要所に周辺の歴史資源などの案内板を設置するとよい
- ・ ボランティアガイドによる説明や案内があるとよい
- ・ 流域の自治体と協力してまちの歴史を案内するボランティアガイド養成をすることが考えられる
- ・ 歴史ポイントを通して川を見ることができるよう情報をまとめる
街道 / 渡船場 / 寺社（式内社） / 古墳 / 水害史 / 尾張名所図絵 / ヨゲ堤 / 伏流水（酒造） / 祭り

川と歴史資源を結びつけるストーリー（例）

- ・ 川に直接関係する史跡：渡し跡、水制工、霞堤、川湊跡
- ・ 洪水に対する暮らしの知恵：桜佐のヨゲ（氾濫を前提とした集落を守る堤防）、水屋
- ・ カミナリ＝雨＝洪水：川沿いに八龍社（カミナリ除け）がいくつかある
- ・ 川＝災害：秋葉神社（火事除け）をリストアップする
- ・ 水の神：水神（桜佐）、弁天社をリストアップする
- ・ 川祭：岩塚七所社きねこさ祭、下之一色浅間社・川祭
- ・ 星＝天の川＝庄内川：星神社
- ・ 地域の歴史と深いつながり：前田家など
- ・ 式内社：「延喜式神明帳」（901～922年に調査）にのっている古い神社
- ・ 流域に特に数多く分布する神社
- ・ 古墳の場所と川の関係（古墳ルートから川がどのように見えるか）

桜佐のヨゲ堤（春日井市）

ヨゲ堤は桜佐の集落の周りに築かれた堤防で、庄内川があふれても被害を少なくする工夫。普段は堤防の切れたところから通行できるようになっているが、洪水の時には石の柱の溝に板をはめヨゲ堤の開いたところを閉める。八龍社には2本一組の石柱の内の1本が残っている。石柱には溝が彫っており、この溝に板をはめて通路を閉じ洪水の侵入を防いだ。



桜佐のヨゲ堤



ヨゲ堤の水神様



八龍社に残るヨゲ堤の柱

神社



桜佐の東八龍社（カミナリ除け）



中味鏡の西八龍社



上小田井の星神社（岩倉街道）



美濃路街道の屋根神様



萱津神社（漬け物の神様）



下之一色の浅間神社

街並み・昔を伝える風情



岩倉街道（上小田井）



美濃路街道（西枇杷島町）



下之一色魚市場



瀬古の蔵式水屋（東春酒造）



土岐川沿いの酒屋（瑞浪）



土岐川沿いの建物（瑞浪）

2 - 2 多様な生態系を育む環境、ゴミのないきれいな川にするために

生態系・水質・ゴミグループからの提案

【主なテーマと解決課題】

源流から河口まで、流域全体のつながりと広がりを大切にする。

現状の貴重な自然を生態系の核として保全する。

周辺の自然環境とのつながりや人と自然の係りを大切にしておく。

現状の自然資源を生かしながら、積極的に自然環境を回復しておく。

解決課題

- ・魚道の問題：【小田井床止・神明上条用水堰の魚道・玉野堰の魚道】
- ・ゴミの問題：【藤前干潟・稲永公園・ヨシ原】
- ・水質の問題：【八田川合流点・愛岐処分場周辺・小里川合流点・源流】

提案1 / 生態系の拠点を核に「緑・水路・池・湿地・水田」のネットワークを形成する

【趣旨】

河川生態系の豊かさは、水源から河口までの「縦のつながり」(連続した河畔林、生物移動、土砂移動など)とともに、本川に合流する支川や小さな水路と湿地・池・水たまり・水田を含めた「横への広がり」が重要であり「アユが棲む川・アユがのぼる川」と「内と外に命がつながる川」を目標にしたい。

そのような連続性を回復していくために、まとまりのある自然的資源を土岐川庄内川の生態系の拠点エリアとして位置づけ、拠点を核にした生態系のつながりを生み出す方策を検討する。

【生態系の核と考えられる候補地】

藤前干潟・河口部のヨシ原 / 庄内緑地 / 新川洗堰 / ふれあい橋周辺 / 勝川橋～鹿乗橋間の中流部：竜泉寺崖下・才井戸流れ・大留橋左岸ビオトープ / 鹿乗橋～県立多治見病院の溪谷(玉野溪谷、古虎溪) / 土岐観察館周辺 / 虎溪山永保寺周辺 / 定林寺川合流点 / 白狐温泉周辺 / 釜戸駅周辺 / 水源(夕立山)



河口部ヨシ原



ふれあい橋下流



志段味ビオトープ池

【方針・取り組み】

- ・まとまりのある自然的資源(拠点)をリストアップし、それぞれの拠点について環境情報を整理する
- ・市民活動団体や学校などの協力を得て定期的、継続的な環境調査を実施する仕組みを検討する。
- ・拠点ごとの調査結果を基に、それぞれの拠点の位置づけや保全・管理方針など、土岐川庄内川全体の生態系回復に関する構想、計画を立案する。

- ・生態系保全、市民参加による管理の「実験の場」を設ける
 - * 河口部ヨシ原：ゴミ掃除、ヨシの刈り取り・ヨシ活用を含めた実験区
 - * 中流部：才井戸流れ、志段味ビオトープ、桜佐など中流部河川の実験区（竹林や河畔林の手入れ、湧水・湿地の保全、池や湿地の創出など）
 - * 定林寺川の合流点：湿地の整備、雑魚がいっぱいいる川づくりなど
- ・庄内用水や上条用水など農業水路を、都市の新たな親水空間とする

【課題・意見】

- ・河口部ヨシ原の多くが民地で刈り取りなど維持管理がなされていない。
- ・ヨシ原の陸地化、乾燥化、治水上の支障などについて懸念する意見がある
- ・河口部は多様な生き物の生息地であり、生物生息環境の保全と改善を第一義的に考える。導流堤への立ち入りやヨシ刈などについては、生物環境との関係を慎重に検討することが必要。
- ・河口部は鮎の越冬地として重要であり、人工海浜にしたい
- ・才井戸流れでは区画整理が進んでおり、生物の減少、水枯れや水質悪化などを懸念する意見がある
- ・河川管轄が異なると情報が途切れる。河川管理者間の調整等が必要



志段味ビオトープ：竹林の手入れ



才井戸流れ



稲永公園前のヨシと水鳥

提案 2 / 市民、学校、行政で協働して育む水辺拠点を流域に増やしていく

【趣旨】

ヨシ原の刈り取りや竹林の間伐、ゴミ掃除など、人が手を入れて育てていく活動を広げる取り組みが必要である。土岐川庄内川では、河口部でのゴミ掃除や才井戸流れ、志段味ビオトープでの活動、土岐川観察館（多治見市）で行われている日常的・継続的な活動などがあるが、このような活動に地域住民や学校、自治体などが加わり、協働して育む仕掛けや仕組みが重要である。

【取り組み】

- ・流域で活動する団体等の情報交換等を継続的に行う場を設け、緩やかな人的ネットワークを形成する
- ・流域の小・中学校・高等学校の先生や生物部および地域団体の連絡網を形成する。
- ・水質一斉調査や生物調査を市民や周辺の学校などに呼びかけ継続的に調査データを積み上げていく。
- ・調査の過程に市民が参加することによって、それぞれの拠点を市民自らが維持管理していくきっかけを生み出すことができると考えられる。



ヨシ舟（北上川）

- ・学校教育や地域活動で活用できる自然資源マップあるいはガイドブック、情報誌を作る。
- ・ヨシ原の刈り取りとヨシ舟づくり、竹林の間伐と竹炭づくり、筏遊びなど「楽しみながら手入れする」活動を広めてゆく。



土岐川観察館



がさがさ探検：土岐川観察館



志段味ビオトープ：竹イカダ

提案3 / 河川の自然を回復し、水質の向上を図る

【趣旨】

瀬や淵があり、中州があり、川が蛇行している。多様な川環境があることによって川の生き物の豊かさが支えられている。河川改修によって単調になった川に多様性を回復することを河川整備計画の中に位置づけ、実現していく。

水質改善については、行政、企業、市民レベルの取り組み、特に問題となっている場所の浄化対策を検討する。

【方向性と課題】

(1) 現存する良好な自然エリアや川の多様性を保全する

- ・河川整備計画では、現存する良好な河川環境を保全し必要な保全方策を講じることを盛り込む
- ・護岸をコンクリートで固めるのは必要最小限にし、植栽や緑化は本来の植生の回復を基本とする。

(2) 瀬や淵など失われた川の自然と多様性を復元する

- ・失われた瀬や淵、中州など川の多様性を可能な限り復元することを河川整備計画に盛り込む
- ・住民はかつての瀬や淵などの情報（写真やスケッチなど）と復元に関するアイデアを提供し、行政は掘削機（コンボ）と操作員を提供するなど、現場で話し合いながら協働して復元作業を行う（事例 / 栃木県余笹川）
- ・川の自然は変化することを前提に、工夫を継続する（失敗を責めない。実験的、順応的管理）

(3) 川本来の自然的な環境を保全復元し生き物と人とがともに豊かに関われる川づくりを工夫する

- ・堤防の防護や低水河岸の整備に当たっては、河岸や水際部をできるだけ自然に近い形にする。

(4) 堰や床止め、魚道の改善を図り、魚が移動できる環境をつくる

- ・アユだけでなく他の魚類や水生生物、鳥類についても調査し、魚道や遡上した先の河川環境の有効



水質生態系グループによる水質生き物調査

性や問題点について調査をする。

・改善が必要と思われる魚道：小田井床止、上条神明堰、玉野堰

* アユと鳥類（カワウ、サギ類）の問題は立場によって様々なとらえ方がある。共有点を見いだすため何らかの取り組みが必要。



小田井床止



上条神明堰



玉野堰

(5) 行政、企業、市民レベルの水質改善、特に水質が悪い場所の対策を進める

- ・八田川合流点の水質が極度に悪い。浄化施設を設置するなど重点的な対策が必要。
- ・高水敷を利用した小水路による実験的水質浄化の検討（実験方法の検討、市民の受け皿づくり）
- ・下水処理水や企業排水の浄化対策、汚水と雨水の分流が必要
- ・上流部に魚が少ない、夏場に PH 値が上昇するという指摘がある。なぜ魚がいないのか、魚が棲みにくい要素や PH が上昇する原因を解明し、改善してゆくための調査や実験が必要。



八田川合流点の汚濁水

(6) 河川整備への住民参加、合意のシステム

- ・住民は、地区の歴史や自然資源を元に「生態系から見たデザインの手引き」を作成する
- ・行政は、案の策定前の段階から住民と話し合い、工事段階でも参加の機会を設ける
- ・工事後の評価や改善を協働で行う。

提案4 / ゴミのないきれいな川づくりを進める

【趣旨】

河口部の川岸やヨシ原には、多くのゴミが堆積している。上流から流れ着いたものが多く、流域全体の問題として取り組む必要がある。また、ゴミに対する行政の対応は、各自治体によってシステムが異なるため、流域全体で取り組むことを困難にしている。

【考えられる方策】

- ・河口部で行われている清掃活動を軸に活動を広げ、流域全体で「ごみ収集大作戦」を展開しゴミの種類などをマップ化、情報交換を行う。
- ・河口部については、上流の学校や地域団体に河口部に足を運んでもらい、自然観察などを通してゴミ問題についても考える機会を作る。
- ・アドプト事業を広める

【改善課題】

- ・河口部は堤防道路の交通量が多く、水辺にアクセスしにくい堤防構造になっており、ゴミ収集活動が思うようにできない。近づきやすい構造に改善する。
- ・回収したゴミ処理が機能的に展開できるシステム（自治体の協力体制）が必要



稲永公園前のヨシ原にたまったゴミ。河口部にはたくさんのゴミがたどり着く。

2 - 3 豊かな川体験を伝え、川を憩いの場とするために

体験・憩いの場グループからの提案

提案1 / 「川沿いにずっと歩ける道」を確保したい

【機能】

- ・長い距離を歩けるウォーキングルート（広々として自然を感じられる健康の道）
- ・流域の歴史や文化を体験するポイントをつなぐ道づくり。（提案2の「散歩道（トレイル）」のルートとしても考えていく）
- ・防災のための道



新土岐川橋付近（土岐市）

【課題】

- ・車の入らない道が川沿いに確保されているところは、少ない。
- ・川沿いに木陰がない（日差しを避けほっと一息つける場所がない）

【整備の方針提案】

- ・できる限り、堤防上あるいは川側（高水敷）に歩ける道（車の入れない道）を確保する。
- ・下流区間の堤防道路は一方通行にし、川表側に歩行空間を確保したい
- ・歩く道沿いの要所に木陰を確保する。可能な場所では堤防に盛土をして並木を植え、育てたい。現状の課題 / 歩道を整備しても、殺風景で、歩いていても木陰がない。（例 / 多治見）
- ・ポイントに看板の設置。（化石、酒屋、染色屋、漁業、用水）
- ・見晴しのいいところ、木陰等にベンチを設置する。



下流の堤防道路：車の通行が多く、歩道もないため川沿いを安心して歩けない。川に近づきにくい。



堤防下をサイクリング



ほっとできる砂利の散歩道



木陰があると一息つける

- * 庄内川の河川空間利用調査では散策、スポーツ利用がそれぞれ50%程度。水遊びは3%にすぎない。
- * 散歩利用が多いということはまずは安心して歩ける道、要所に一息つける木陰などがあることが大事だということ

提案2 / 川沿いのポイント結ぶ「体験学習回遊ルート」を策定する

川をながめ、景色をながめ、人をながめ、歴史、文化を伝え、地域の交流をすすめるための体験回遊ルートを考える
地域の歴史と川はきりはなせない。つなげてたどることで歴史、文化の交流がうまれる。



下津尾の渡し跡：説明板があるとよい

【方針】

- ・川沿いの歴史文化、環境学習のポイントをピックアップし、それをつなぐ回遊ルート（トレイル：散歩道）を設定する。
- ・「東海自然歩道」のように市民に愛される名前を市民公募でつける
- ・内容的には、総合学習に役立つようなものを選ぶ。

川沿いには、化石、漁業、酒屋、染物、産業遺産がちりばめられている。王子製紙取水場も、川が産業に貢献していることを伝えたい。愛知用水の説明も入れたい。水位メーターは、災害や防災の学習になる。支流が入ると臭い、汚れ。子どもといっしょに川の問題を見ると、大人も考えさせられる。

【具体的な事業案】

- ・ポイント選定、ルート設定のための、参加型の調査のプロジェクトを、学校の先生なども参加して組み立て、子どもたちにも資源発見やルートづくりに参加してもらう（事例/ロンドンのテムズ・トレイル）

- ・参加による案内地図、説明ブック等の作成。
- ・ホームページ実行委員会を設け情報収集整理し、マップという形にする。
- ・参加、協働による案内版の作成と設置、維持管理。
- ・案内ボランティアの養成が必要。
- ・活用モデルプログラムの実施。
- ＊川ナビ事業、土岐川観察館などの連携をつくっていく。

【活用の展開イメージ】

- ・学習トレイル（回遊ルート、散歩道）の、学校の授業への実験的な活用プログラムを積み上げ他の学校にも活用してもらう。

- ・流域の学校がお互いの学校を訪ねるようなプログラムも考えられる。

＊参考 / 2001 年度に、庄内川河川事務所の実験的な事業として、上中

下流の 3 つの小学校での総合学習の取り組みと、その成果をもとにした流域交流学习プログラムが提案されています。そのようなプロジェクトの継続には、地域や市民団体が主体となってプロジェクトを進めるための支援システムが必要となります（行政や教師が主体だと、人が変わると立ち消えになるので）。

「支援システム」として考えられるのは、「拠点づくり」（上流の土岐川観察館のような施設が、上中下流にありネットワークするとか）を中心に、「プログラム開発」、「支援スタッフ」（川ナビ、川の学芸員）が行われる、「資金援助」などが考えられます。

- ・流域を歩くイベントも行いたい。



水辺の楽校（土岐小学校）

提案 3 / 「遊べる河原」「降りられる場所」を確保し、市民との協働で「川辺の小路」を管理する

【機能】

- ・自然体験のできる生態系の豊かな河原、自由な利用ができるアウトドア遊びの河原、渓谷でのバーベキューなど、河原の状態を活かした体験や遊びができる河原を保全活用する。

【整備課題】

- ・特に下流域では、ゴルフ場などの占有利用面積が多いこと、芦が密生しているなどで、市民が自由に入れる自然な河原がほとんどない。
- ・河原でのバーベキューは、河原を汚したりゴミの散乱の要因ともなるのでルールや管理のあり方について検討する必要がある。

【整備の方針提案】

- ・下流域では、河川敷の占有利用の面積、用途をコントロールし、自然な河原を確保する。
- ・「川辺に降りられる場所」を、橋のもと、「川辺の小路」の入り口などに確保する。
- ・できるかぎり木を残し、できれば新しく木を育てる。

＊市民グループと行政と協働または、アドプト活動として「川辺の小路」を市民グループなどが整備管理する。



河原に降りられる小道
グッドデザイン！

* 「川辺の小路」の策定にあたっては、民地内（ゴルフ場や農地の川べりなど）でも所有者の協力を得て設置できるような協力をあおぐ。



鹿乗橋上流右岸：バーベキュー



愛知環状鉄道下流右岸の河原



新東谷橋下流右岸の河原

提案 4 / 「川を楽しむミニ拠点（川の駅）」の設置

【機能】

- ・ 散策、アウトドアなどの時の拠点をつくる。

【整備の方針提案】

- ・ 流域の各要所に、トイレ、水道、木陰、駐車場を提供する「ミニ拠点（川の駅）」を配置する。
- ・ 場所は、「川沿いにずっと歩ける道」「遊べる河原」との関係を見ながら、景色のいいところに設置する。川、河川敷へのアクセス拠点とする。



竹林の小道（志段味ビオトープ）



水分橋下流右岸：駐車場、簡易トイレ



遊べる河原

提案 5 / 下流に「川遊びハウス」を設ける

【コンセプト】

- ・ 上流の「土岐川観察館」のような川の体験の拠点を下流にも設け、下流の川にかかわる活動の拠点とすると同時に、流域の拠点ネットワークの一つに位置付ける。
- ・ 下流は、自然観察などを主体とする拠点ではなく、まず川に親しんでもらうという意味で、川遊びをサポートするような拠点をつくりたい。
- ・ 拠点は、数カ所に設置し、ヨシ原の保全活用、ボート遊びなど、多様な市民活動や市民レクリエーションを育てていきたい。

【施設イメージ】

- ・施設は国、もしくは自治体に設置してもらい、運営は（行政の支援を受けながら）市民主体で行うようにしていきたい。

具体的な場所としては、以下の場所が候補地としてあげられる。

- ・建設予定の水防拠点（枇杷島、下之一色）に、「川遊びハウス」機能を持たせる（設置主体は国）。下之一色の水防拠点は、ヨシ原の保全を市民参加で進めるための拠点として活用できるとよい。
 - ・大学ポート部艇庫付近に整備予定の親水護岸は、ポート部などとも連携して水面利用の拠点として広く市民が有効活用できるよう運営を行う。
- * ヨシ原の保全を市民参加で進めるための、河口付近の拠点。

【活動イメージ】

- ・川遊びのためのボート、パラソル、救命具などをレンタルする。
- ・川遊びの指導ボランティアにより、さまざまなプログラムを開発、展開していけるとよい。
- ・「ヨシ舟づくり」「ヨシの家づくり」などのイベントをコーディネートしていく。



大当郎橋付近にあるボートハウス



16年5月に行われた親子体験ボート



ボートが浮かぶ川の風景



多治見市の活動拠点となっている土岐川観察館



2 - 4 流域全体で治水安全度を高め、地域の防災力を高めるために

治水防災グループからの提案

主要なテーマと取り組み課題

地域の特性やリスクに対応した治水・防災対策を進める

下流域は堤防で守られており、洪水時の水位が高いことから内水や氾濫溢水による被害を最小限に抑えるハードとソフトの対策が重視される。上流域や支川域では、雨水貯留など流出抑制が課題になる。上下流域や支川域の地形的特性や相互の関連性、リスクに応じた治水・防災対策を進める。

雨水貯留施設の普及など流域全体で流出抑制対策を進める。

地域における防災対策を強化する取り組みや仕組みを検討する。

提案 1 / 雨水貯留施設の普及や遊水地の設置など流域全体で流出抑制を推進する

【趣旨】

かつては氾濫区域であったところや遊水地に住宅が建つことによって洪水氾濫に対する被害のリスク（危険度）が高くなり、上流域や支川域の開発によって洪水の流量が増大し洪水が下流に到達する時間が短くなっている。流域の遊水機能を保全し、災害リスクを軽減するための対策を強化する必要がある。

【取り組み課題】

(1) 流域の遊水機能や遊水地を保全する対策を推進する

- ・庄内川にはかつて桜佐（内津川と庄内川に挟まれた地域）のように洪水を一時的に貯める遊水地があり、農的な土地利用とヨゲ（集落の周りに築いた小堤防）や水屋によって暮らしを守る知恵があった。そのような遊水地が開発によって失われている。小田井遊水地の他に新たな遊水地をどのようにしてつくるかが課題である。遊水地としての機能や水防拠点の機能を発揮し、平時は市民が活用できる「遊水地・レクリエーションセンター」をつくってはどうか。
- ・流出抑制対策として溜池や休耕田等の活用を推進する。具体的には、溜池の現状や貯留可能容量などを調査し、洪水時における雨水貯留施設としての改善を図る。親水性や生態系にも配慮した整備を進める。

* 溜池の管理者、利水権者との調整や流域自治体の事業体制等が必要。

(2) 開発調整池の設置を強化し公共施設や企業での雨水貯留施設の設置や浸透舗装などの事業を進める

- ・開発に伴う調整池設置の指導が自治体によって差があり、調整池がきちんと機能しているかどうか疑問がある。開発指導を強化し調節池の設置を義務化する。
- ・公共施設や企業における雨水貯留浸透施設の整備を計画的に推進する。
- ・駐車場や歩道などを浸透型にしたり、浸透側溝を整備する。

(3) 各戸貯留を普及する

- ・個人住宅における雨水タンク、浸透柵、浸透トレンチなどの設置を奨励し、助成する仕組みを整備する。
- (4) 総合的な治水対策を推進するための協議の場や仕組み、基準を確立する
- ・上記の施策を推進するためには、流域自治体や企業、市民の協力が不可欠であり、総合的な治水対策を進めるという共通の目標と合意をつくりだすことが第一に必要である。
 - ・河川管理者（国土交通省、愛知県、岐阜県）が中心になって、土岐川庄内川の流出抑制の目標や指針、対策を構想し、流域自治体や企業等との協議の場を設置する。
 - ・流域における遊水機能の保全区域や河川と流域の分担、開発遊水地の統一的な目標水準、流域貯留浸透事業の推進方策などについて協議を進める。
- * 土岐川庄内川行政連絡会議アンケートによると、大規模開発に対する貯留施設の設置などに関する具体的な計画や実績があると答えたのは 8 / 33（県市町）であり、雨水貯留施設等の補助制度があるは 13 / 33 である（第 6 回土岐川庄内川流域委員会資料）。統一的な基準と開発指導の強化は急務である。

提案 2 / 堤防の強化と水防拠点の整備を推進する

「趣旨」

下流域は堤防で守られており、内水氾濫と本川からの氾濫溢水に対するリスクが高く、浸水被害が広範に及ぶ。特に、破堤した場合の被害は甚大である。特に下流域では、流下能力の拡大だけでなく、越流しても破堤しないように堤防を強化する、水防拠点を充実するなど、被害を最小限に抑えるための対策が重要である。

(1) 堤防を強化する

- ・長時間持続する高水位に対して堤防の安全度を向上させ、越流しても破堤につながらない耐越流型の堤防に改善していく。
- ・河積に余裕があるところや蛇行部などの堤防幅を広げ、堤防の安全度を向上させる。



万場大橋下流右岸蛇行部（下流方向から）

* 堤防の裏法や表法に腹付け盛土をして堤防天端幅を広くすることができないだろうか

(2) 水防拠点を充実配置する

- ・現在、枇杷島と下之一色の2カ所で水防拠点整備が進められているが、河積に余裕がある場所などで堤防幅を広くしたミニ水防拠点を配置する。
- ・水防拠点は普段から足を運ぶ場所になって、いざというとき役に立つ。普段の市民利用（ビューポイント、橋詰めなど）とセットで候補地を設定するとよい。



枇杷島水防拠点予定地



下之一色水防拠点予定地

* ある程度広い敷地があるので、水防機能だけでなく、堤防道路の拡幅と歩車分離、並木、川遊び拠点など豊かな空間として整備したい。



堤防側帯（北上川）：堤防側帯は水防活動等のために盛土して堤防の上幅を広げる方法



* 堤防側帯の方法を応用したミニ水防拠点を充実していくことは可能と思われる。

(3) 治水上の課題が指摘されている場所

- ・新川洗堰：現在進めている新川洗堰遊水地に関して、堤防強度は大丈夫かなど不安がある。洗堰に関する情報不足。
- ・鹿乗橋上流：川幅が狭く岩が多いので危険箇所
- ・内津川合流点：庄内川が大きく蛇行している場所で、右岸に水が寄せられている。堤防強化等の対策が必要。
- ・万場大橋～横井大橋間：大きく蛇行している区間であり、ビューポイントとしての整備検討と併せて堤防幅の拡大など堤防強化を検討する。

提案 3 / 地域の防災力を高める取り組み

【趣旨】

自治体や地域レベルでまちの構造を災害に強いものに改善していくことや、被害を最小限に食い止めるためのソフト的な対策が重要である。

【取り組み課題】

(1) 情報の伝達システムを改善する

- ・大雨の時にはサイレンが聞こえない、川の水位や破堤の情報などローカルな状況がテレビやラジオではわからない、インターネットは高齢者には不向き、避難の判断が難しいなどの問題がある。
- ・放送機関や自治体、河川管理者、企業等による協議の場を設け、川の水位などローカルな情報が住民に伝わる仕組みを検討する。特に、通信メディア（ケーブルテレビなど）との連携、活用を強化する。
- ・水防訓練の際に、放送機関の協力を得て試行する。
- ・避難行動に関する判断基準がないと情報が活かされない。何らかの判断基準（どこどこの水位がどれくらいになったら避難準備をするなど）を示すことが必要。
- ・名古屋市では避難勧告準備情報があるが、他の自治体も工夫が必要。
- ・河川管理者から自治体、自治体から地域（学校区、自治会、町内会、組）世帯・個人への情報伝達の仕組みを検討する。

(2) 避難場所や避難ルートを点検し安全に避難ができるようにする

- ・指定避難場所が水害に対して適地にあるわけでないから、水につかることがある。指定避難場所でないで食料が配分されなかったりする。
- ・避難場所自体の浸水可能性（何階から上が利用できるのか）や避難ルートを再検討し、それぞれの地域に応じて避難準備情報を流すなど、きめ細かな対策が必要。
- ・高いビルの所有者や企業などに一時的な受け入れを依頼するなど、避難場所の拡大を検討する

(3) 地域の情報を基にしたオリジナルなハザードマップづくり

- ・自治体がつくるハザードマップでは、実際の避難行動に必ずしも活かせない。
- ・地域ごとに住民が町を点検して、実際に有効な避難ルートや弱者対策など、地域の実情に応じたオリジナルなハザードマップをつくる必要がある。

(4) NPO との連携と活用を進める

- ・地域レベルでハザードマップをつくる、或いは防災活動を日常化していくには、NPO との連携が不可欠である。自治体が NPO に地域防災支援を依頼する仕組みを推進する。モデル地区を設けて試行することが考えられる。
- ・水防拠点に NPO が常駐し、地域の様々な相談にのるということも有効である。
- ・小中学校の総合学習に取り入れることも検討する。

(5) 災害に強いまちづくりや住まい方、備えなどの情報を整理し伝える

- ・避難の際に家電製品のコンセントを抜く、高いところに置く、ものによっては補修すれば使えるなど災害体験を通して、住民自身が教訓にしている情報がたくさんある。
- ・昔からの言い伝えというものも個人や地域レベルで蓄積されている。
- ・住宅の補修や建て替えの際に土台の構造など工夫を凝らすことで、被害を最小限に抑えることが技術的に可能である。
- ・これらの情報を収集整理し公共的な施設で手にすることができるような仕組みが必要である。

グループ別提案の項目まとめ

4つのグループからの具体的な事業となりうる提案項目、第8回の成果、達成意見で出された提案項目を整理してみました。

付属資料1

【整備事業にかかわる提案】

川の豊かさをつくる提案

- 河川の自然を回復する (生保系①)
 - ・河川周辺の雑草作業を市民参加で行う。(生保系①)
 - ・生物のためた人の認知のための標識を計画的に配置する。(生保系①)
 - ・単独活動であるよう、河川を区画、東進を改善する。(生保系①)
 - ・生保系、関係者を連携し、河川周辺の緑地の管理育成を行う。(生保系①)
 - ・できるかぎり木を植し、できれば新しく木を育てる。(休職①)
- 歴史・文化を感じさせるデザインをする (休職①)
 - ・歴史の遺構(石山、橋、土木遺跡等)の保存。
 - ・地域参画による、地域特有の風景を生み出す修繕デザイン。
 - ・歴史ポイントに説明板、案内板の設置

川とのかかわりを生み出す提案

- 川沿いを連続して歩いて歩けるようにする (休職①)
 - ・下流/運動道を一方通行にし、川沿いに歩行空間を確保する。
 - ・歩道/歩道の入りない部分を、できるだけ長く確保する。
 - ・多く遊歩の歩道に木陰を確保する。
 - ・運動道プロジェクトの一環で、サイン、説明板を設置する。
- 適切な場所川に降りられる道、階段をつくる (休職①)
 - ・橋脚の「川の一本橋」等、小広場を配置する (休職①)
 - ・ピコポイント(見晴らしのいい場所)に木陰やベンチを設置する。見所マークを設置する。
 - ・旧田舎との繋がりや川と遊び交差する橋脚に「川の一本橋」など川沿いの風景、川に降りられるようにし、川の岸の賑わいをもひろげるようにすることで、川遊び、防災などの機能を持たせる。
- 保全、林型緑地の緑地を位置付け、整備する (休職①)
 - ・既存の林、アフトドア等、パーベニューなど、灌漑を活かした活用ができる「遊ぶ河原」を設定し、保全する。
 - ・「遊ぶ河原」に、トイレ、水場、木陰、駐車場を併設する「ミニ活動拠点」を設置する。

川での市民活動拠点となる「川遊びハウス」を設置

- ・ヨシ原の保全活用、ポート遊びなど、多様な市民活動や市民レクリエーションを育てる拠点を創設する。(休職①)

治水安全度を高める提案

- 治水安全度を向上させる整備を進める (治水防災①)
 - ・遊歩道、水たまり、公園緑地をもった大規模公園をつくる。
 - ・できるこころで堤防高を上げ、二次水たまりとして活用。
 - ・遊歩道でも遊歩道という役割強化を進める

【新しいしくみづくりの事業提案】

河川の工事計画への市民参加

- 「川づくりのデザインの引き」を作成する
 - ・地区の中心や河川沿いの風景の調査データをもちこちを元に「川づくりのデザインの引き」を作成する。(生保系①)
- 工事計画への参加、事後評価のしくみをつくる
 - ・家の固定費に組みこみ住民と話し合い、工事開始でも参加の機会を設ける。(生保系①)
 - ・工事後の評価や改善を市民参加で行う。

環境保全等にかかわる実践的な取り組み

- 環境保全にかかわる実践区を設ける
 - ・生保系地区の「実践の場」を設け、市民参加で管理型を行う。(河口区3分団、江戸川町4分、志保町2分団、稲佐、定通寺川の川沿いのなど)。(生保系①)
 - ・水質の浄化装置を遊歩や工夫をする。高水期を利用した小水車による実践型浄化の検討。(生保系①)
 - ・杉山、北河川沿いに水車を建てよう。
- 保全、林型緑地の管理を地域団体に依頼する (休職①)
 - ・アフトドア事業で河川の「川沿いの小広場」を管理型にする。
 - ・「遊ぶ河原」の管理を、地域、市民団体のアフトドア活動で行う。
 - ・扇山、ゴミ、防災等の対策、ルールをつくる。
- 回収したゴミ類のシステムを自治体と共に考える (生保系①)

流域での連携づくり

- 緑・水跡・池・湿地・水田の生態系ネットワーク計画
 - ・本川に合流する支流や小川の水田と湖沼・池・水たまり・水田などの水辺の連携、高水期などの遊歩活動のある生態系ネットワークの連携計画をつくる。(生保系①)
- 流域全体で総合的な治水対策を推進する (治水防災①)
 - ・河川沿いの治水として遊歩や休田等の活用を推進
 - ・河川沿いの治水を強化/公共施設や企業での治水の連携強化/治水対策の普及(実践型)
 - ・河川沿いの治水や治水との連携の場を設置する。→流域で、遊歩活動の連携、河川と治水の分岐、防災治水の統一部分目標を策定、地域の治水事業の推進の場などを協働する。

- 地域の防災力を高めるための体制づくり (治水防災①)
 - ・防災機関、行政等の関係の連携を強め、情報伝達の仕組みを改善
 - ・地域ごとに河川沿いの遊歩や治水ルールを定め、連携型の防災など地域に見合った防災対策を検討。

【市民活動支援型の事業提案】

調査研究・提案活動

- 生保系から見た河川環境調査に取り組む
 - ・生保系の取らざるおとを定め、定期的に、継続的に環境調査を実施し、情報を整理・体系的な計画案をつくる。(生保系①)
 - ・調査で得た河川環境の有効性や問題点について調査をすすめる。(休職①)
 - ・漁が少い(生保系)と聞かれるおとを調査のPRが上がる調査(特に上流部)を検討し、改善してゆくための調査や実践が必要(生保系①)
- 歴史資料にかかわる調査活動に取り組む (休職①)
 - ・川の歴史の調査や歴史資料の調査、風景の変化を調べる。

流域での情報交換、情報発信

- 流域情報(歴史、文化、環境)を共有して積み上げる (休職①)
 - ・ホームページ発行委員会、団体や個人の情報を収集、整理する。
- ポイント紹介「体験学習巡回ルート」を設定する
 - ・流域情報を整理し、ルートを設定を行う。(休職①)
- 流域の情報マップ、ガイドブックを作成する
 - ・歴史、環境、文化、自然の情報をマップ化、図説、解説ルートを作成して発行する。(休職①・休職①)
 - ・学校教育や地域活動で活用できる図説やマップ、ガイドブック、情報誌を作成。(生保系①)
- 自主的な訪説方などの情報を整理し伝える (治水防災①)
 - ・生保系、災害体験での住民自身の調査、若い伝え等を収集整理し、任意の形でやさしい情報として発信する。

啓発、活動プログラムの推進

- ボランティアガイド、体験学習プログラムの実施
 - ・ボランティアガイドの体制をつくる。(休職①・休職①)
 - ・子どもたちの体験プログラムを開発、普及する。(休職①)
- ゴミ収集大作戦を流域で展開する (生保系①)
 - ・上流の家屋や河川沿いの河川沿いにゴミを積みこみ、回収場所などを通してゴミ問題について意識を高める。
- 地域主体の防災活動を進める (治水防災①)
 - ・地区ごとのパワードマップづくりに取り組む。
 - ・個人や地域レベルでもできる防災対策マニュアルをつくる
 - ・NPOや行政の連携で、プログラム開発、実践支援等に協力する。

水辺空間整備に関わる提案のポイント

豊かな川の自然
生き物のにぎわい

■生態系の拠点／実験区
 ・川の豊かさを支えている場所を生態系の拠点として河川整備計画に位置づけ保全と管理の方針を定める
 ・生態系保全の「実験区」を設け市民参加で管理活動を進める

豊かな原風景
歴史的資源

■ビューポイント／橋詰め広場
 ・ビューポイントは、市民の目線から見た「いい川」の価値となるものであり河川整備に活かしていきたい
 ・川と道路が交差する場所を河と町・歴史をつなぐ橋頭点として整備し、市民による活用管理を進める

多様な川との関わり
豊かな川体験

■遊べる河原／川辺の小道
 ・川の自然や生き物たちとふれあうことのできる体験遊び場を発見し、「遊べる河原」を市民参加で育む
 ・川との楽しい出会いを演出する「川辺の小道」を市民参加でつくり市民による活用管理を進める

安全・安心

■ミニ水防拠点／幅広堤防
 ・堤防の天端幅を広くして、洪水が堤防を乗り越ええるようなことがあっても確率しにくいように改良する
 ・堤防の法面を植土してミニ水防拠点として活用する

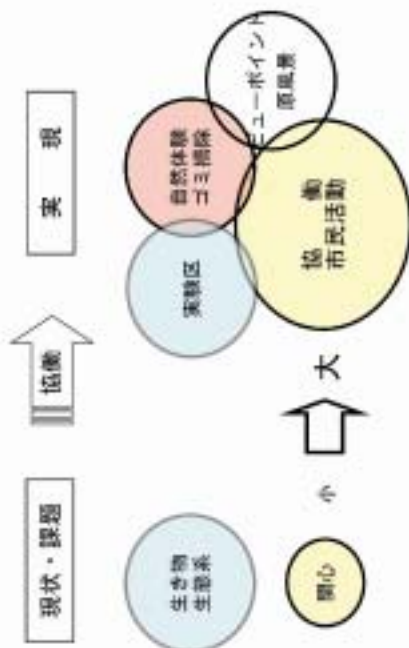
■庄内川アダプト事業

庄内川流域の団体や企業が庄内川の一定区間の河川管理に関わるアダプト事業がモデル的に実施されている。河川清掃、河川バトロールの実施、水防活動への参加、河川環境調査、花壇づくりや管理活動が対象になっている。
 市民による多様な自主的活動を広げ、活動を支援する仕組みや協働の仕組みをよりいっそう充実させる必要がある。

■協働で進める豊かな川づくりの概念図

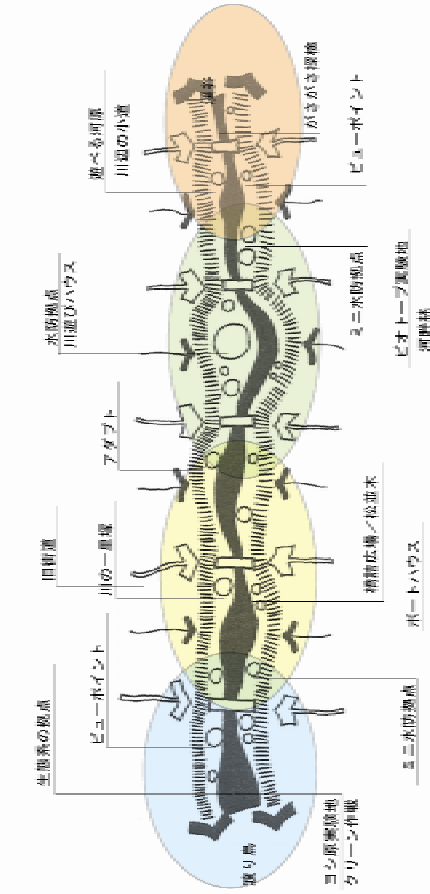


■水辺整備のアクションプラン



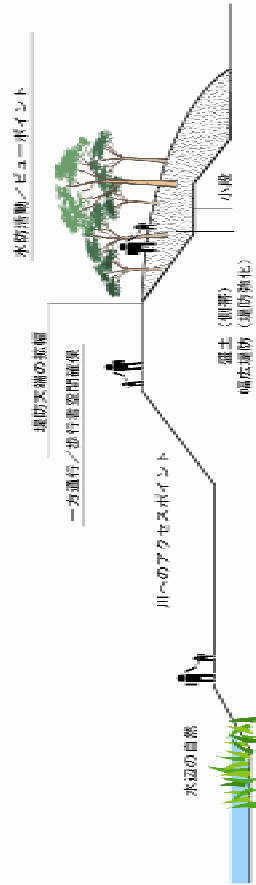
土岐川庄内川には、たくさんの方々が活躍しています。また、課題もたくさんあります。これらの課題を話し合い解決していくためには、国庫がポイントになります。私たちの提案する水辺整備は、川に関心を持つ市民や地元の方々が広く積極的に関わる水辺であり、河川管理者や地元自治体との協働を前提としたアクションプランです。

■変化に富んだ多様な「場」と「空間」の配置



土成川・庄内川には、河口干潟やコシ原、ビューポイント、広い河原のある場所、河畔林が美しい場所、渓谷、入がに寄わる場所、山と谷並み、神社仏閣など、多様な魅力要素があります。つまり、多様な空間、多様な場があちこちにあるということが、川の豊かさそのものであるということです。多様な環境要素をもった場の空間配置や連続性が豊かな川づくりの指標になるものであり、河川整備計画では、これらを適切に保全育成していくという視点が重要です。

■どのようにして実現させるか／堤防天端の拡幅



川沿いを連続して歩くことができ、所々に本臨が取り付くことができる。河畔林や並木があると川の風景はもっと美しいものになり、多くの人が川に親着を持って居るようになる。そのためには、スペースが必要です。そのスペースをどのようにして生み出すことができるか。この図は、一つのアイデアです。堤防の法面に設けられた小段に植付け盛土をして堤防の天端(通路の部分)幅を広くしたらどうでしょうか。堤防の幅を広くすることによって、洪水の増速に對してもより強い構造になると考えられます(防護しにくい)。桜づつみモデル事業では自治体と前立し用地幅を拡大して実施していますが、堤防の堤防敷地の範囲で実施できるケース、川沿いの公営スペースと一体的に整備するケースなどが考えられます。地域のコンセンサス、周辺自治体の協力、市県による活用管理が必要です。



堤防天端の範囲内で小段に盛土をして防護としたケース
加治川(新潟県)

個別のアイデア（個人、グループの意見より）

【整備への要望、提案】

干潟がない処に渚をつくって、アユの稚魚の生息地を確保・整備したい。（稲永公園など）

魚道のデザインと管理を見直したい。関係者が集まって協議できる場が設置できるとよい。

河畔に木を増やしたい。市街地の中の川は殺風景。多治見は、コンクリートと護岸で美しさが無い。

昔あった桜並木を復活させたい。桜、柳を新しく植えて、市街地の川辺に木を植えて緑化したい。歩道を整備しても、殺風景で、歩いていても木陰がない。（例/多治見）

これに対して/堤防の木は倒れると洪水の時に、破堤することがあるので問題ではないか。

川の中の木を大事にしたい。

堤防等の緑化に取り組みたい。植生のあり方について、外来種は植えないなどのルールが必要。

多治見の堤防に木を植えて、灯籠を置いて、雰囲気を作りたい。

多治見は、家が堤防にくっついていないので、木を植えるスペースがある。橋詰ーヤナギ、道しるべなどで、雰囲気を作りたい



風景デザイン、維持管理への市民参加、協働事業を進める。

- ・デザインは、斬新で都会的なものとはせずに、参加のデザインで、そこに住む人が親しめる、風土性や歴史性のあるものにし、市民の愛着や自慢を引き出す。それにより、活用したりメンテナンスにかかわろうという市民の動きを引き出す。

- ・そのためには、コストが安く、手入れが楽なもの素材やデザインであることが大事。

用水への通年通水や水量を増やすなどして、生態系や景観を豊かにする。

- ・庄内用水/通年通水をしてほしい。魚溜まりがあるが、通年通水しないと魚は生息できない。
- ・黒川・堀川/水量を増やして欲しい。そうすれば、水も浄化される。

木津用水と新木津用水を観光に活用したい。

土岐川は川に降りるところが少ない（庄内川には河原があるが）昇降口を増やす必要がある

仮想ダム（ミニダム）を設置して遊水機能を持たせる。

各支川に鉄製の水槽を段々に設置して、水を溜めてはどうか。大きなダムではなく、小さなダムをつくったらどうか。溜めた水でエネルギーを回収できるとよい。

【活動、取り組みについて】

手作りの小さな水質浄化施設づくりの提案

大変小規模で実験的に過ぎないが、河川敷内本流と堤防との間の草地に本流より分流した小川を作り（床止めとの段差を利用導水する）なるべく蛇行させ、「わんど」と「瀬」とを組み合わせ長さは1km以上としたい（堤防にはあまり接近しない）ただパワーショベルでの掘りっ放しとし「自然植生」「自然生態（動物）」としその遷移にまかせ、地域の子供や大人の研究（水質も含む）や遊びの場とする。河川敷内草地域はスポーツなどの施設に多く利用されているが、現状を踏まえて考えれば前記施設に優先すべきものと思う。

渡し船をイベント的に復活させる。

ホームページをつくる。

市民グループが集まって「実行委員会」を立ち上げ、流域の情報を積み上げ、いろいろなグループや個人の情報を収集・整理して、提供できるようにする。

また川歩きの情報、歩いた人のレポートなどものせられるようにしたい。

歩きたい人、学校の調べ学習などの時に、情報が取りだせるようにする。

ホームページで、情報収集～整理活動～活用をしてから、マップをつくれればよい。

川をたどって環境学習をするためのテキストづくり、プログラムの実施。

学習トレイルとして、川ぞいの学校に歩いてもらい、流域の学校の交流をつくる。

総合学習に役立つような教材、案内をつくる。化石、漁業、酒屋、染物、産業遺産がちりばめられている。王子製紙取水場も、川が産業に貢献していることを伝えたい。愛知用水の説明も入れたい。水位メーターは、災害や防災の学習になる。支流が入ると臭い、汚れていることもわかる。子どもといっしょに川の問題を見ると、大人も考えさせられる。

市民参加でつくる「生態系・利用から見た、デザインの手引き」

(基礎資源データ)

・現在の課題

・地区の歴史、自然資源を地図に落とす(MAP化) どこにどんな生き物がいるかのデータ

・昔の瀬、淵の姿の記録をおこす

(デザインマニュアル)

・生物から見たデザインのポイント

・子どもの水辺体験の視点からのデザインのポイント

生物調査を定期的いきちんで行う。

河川生態系の豊かさを客観的に具体的な尺度で確認することが必要である。しかも定期的に継続した指標ならびに新規進入または退化した種(植物、昆虫、魚、鳥など)を対象にしたモニタリングの実施を提案したい。

・河川の上流～下流を点から線で調査ルートをきめる。

・市民や学生の協力も得て、専門的スタッフの主導で。(確実な種の同定が必要なため)

・地球温暖化や外来種の移入の実態調査や対策にも有効なデータとして活用できる。

・親しめる水辺空間づくりへの基礎データにもなる。

土岐川上流のpH(ペーハー)が高いので、定期的に水質調査を行い、かつての魚がいた環境を取り戻すための対策を考える。

八田川合流付近の水質が悪いので、水分橋上流側、八田川合流点、八田川合流点上流側の3ヶ所で定期的に水質調査を行い、原因を知り、対策を考える。

「子どもガサガサ探検隊」～流域の交流と連携

子どもガサガサ探検隊交流会として、関係行政も参加し「子どもガサガサ探検交換一日留学制度」、「同・交換留学生制度」を設ける。各地域の子どもガサガサ発表会を行い子どもサミットを開催し、人的交流をもとに、地域間の現状を把握して地域を理解する。

今、流域で取り組まれている市民活動をきちんと調査し、活動マップをつくってはどうか。

そこから、協働事業の可能性が見えてくるのではないかと思う。